

書評：清水郁郎著『家屋とひとの民族誌：北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』

著者	樫永 真佐夫
雑誌名	文化人類学
巻	71
号	1
ページ	141-144
発行年	2006-06-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/4590

書評

清水郁郎著『家屋とひとの民族誌-北タイ山地民アカと住まいの相互構築史』東京、風響社、

2005年2月、428頁、8400円（＋税）

樫永真佐夫（国立民族学博物館）

北タイの山地民アカの家族が民族衣装を着て食事している写真、そして彼らの家屋を俯瞰した平面図、この2つが重ね合わされた表紙デザインは、本書が建築学と人類学の手法を結合させて執筆されたアカの生活誌であることを端的に物語っている。都市外部の自律的集住村落における家屋に関心をもち建築計画学を修士課程まで専攻していた筆者（清水）による、2年以上の現地調査の賜が本書である。家屋を手がかりに、家屋の物理的变化、住み手による家屋に対する意味づけの変化、住み手が意味づけのために参照する慣習的規範の変化という三者の相互関係が綿密に考察されている。

本書は9章から構成されている。結論の第9章に至る序論（第1章）と本論（第2～8章）の概要は以下の通りである。

「第1章：家屋のパースペクティブ」ではまず人類学における家屋研究史を概括する。家屋をマイクロコスモスにたとえた静態的象徴分析が1980年代以降批判、修正され、住み手の社会関係を含めた動態的側面への注意が高まっている現状を指摘する。次いで、家屋の物理的で形式的な特徴を理解した上で、「家屋形式／住み手をめぐる社会関係／住み手による家屋に対する意味づけ」という3者がどのように関わり合っているかを動態的に考察することを表明する。実際、人類学における家屋研究では建築の形式的側面について手薄で

あったし、それを把握した上での動態的家屋考察は類を見ないと思われる。

筆者は研究上の位置づけを明示したあと、調査地の概況と調査の手法について述べる。調査村は、ビルマ側からの移民によって1980年代できた68世帯359人からなる村である。焼き畑を主体とする経済状況、インフラの普及状況、伝統的には精霊崇拜だが25世帯がキリスト教に改宗しているという宗教の状況、伝統的な儀礼実践における系譜の重要性と父子連名制という記憶システム、父方キンドレッドに基づく親族組織によって分節された村落組織といった社会組織の現状が概観される。

本論部では対象をまず遠景からとらえる手法がとられている。筆者が本書の舞台設定（p. 6）と述べる「第2章：生活の舞台-ロウチの村落」、「第3章：生活の舞台-ロウチの屋敷と家屋」では、外部世界との関連で村の内部空間をロウチと呼ばれる伝統的なアカの村民がどのように観念しているかを示す。第2章では、村の観念的な入り口である2つの門によって村の内外が結界され、外部世界が人に災厄をもたらす霊的存在の領域であり、一方で人の居住空間としての村内世界がゾエマという政治的、宗教的指導者によって作られ、維持されている時空間であることを示す。続く第3章では、屋敷地内の家屋、菜園、水場などの配置に始まり、さらに家屋そのものを近射していく。具体的には、家屋建築の素材（木材、竹など）、身体寸法に依った構法を詳述し、住み手の日常的な使用と伝統的観念に基づいて家屋の内部空間が水平方向と垂直方向にどのように分節されているかが考察されるのである。

静態的な家屋理解が目的なら、アカの伝統的家屋の形式的特徴を示した第3章までで十分であった。しかし筆者は「第4章：女性-豊かさを運ぶ存在」で伝統的な家屋内部の使用

法をえぐるように分析し、住み手の観念のさらに奥深くへ入り込む。まず、婚姻結合による家族形成の根底に、父系祖先との系譜的つながりを持つ男性と、世帯外部から豊穡な生命力をもたらす再生産によって系譜を連続させる女性の一体化、という観念的な関係性を掘り起こす。そのうえで、祖先を祀る祭壇をほぼ中心として男女の空間が明確に左右に分かれている家屋構造に、この男女間の非対称だが相互補完的な二項対立が反映されていることを示すのである。とくにこの章では、祖先との関係において女性が男性と同等の資格を得るためのヤイエヤマの儀礼過程が分析され、民族誌的に興味深い記述となっている。実は祖先を祀る祭壇は、家屋の中心といってもかならず女性の部屋内部に設置されている。その理由を考察したのが「5章：神話-家屋理解の知的道具」である。かつて人と霊的存在は共住していたが、仲違いして霊的存在が去った。こうして、かつて人が住んでいた空間に女性が住むようになった。この種の神話や民族誌的諸事象の分析から、男性が死や村外での活動に、女性は生や家屋内での生産労働に結びついているという象徴的対立を導きだす。祖霊と交信するための物的装置が女性の空間に設置される根拠もこの対立との関連から理解できるとする。

人と霊的存在との関係性については「6章：霊的存在-空間を組織する鍵」でも詳しく取り上げられる。この章では系譜の「暗唱者」の儀礼における行動を分析し、そこからロウチと家屋の関わりが考察される。すなわち、祖霊である「内部の霊」を適切に祀らなければ「外部の霊」によって災厄がもたらされ平和が約束されないという観念ゆえに、ロウチは慣習的規範に則った構造の家屋に住み、適切に祖先祭祀を実行しようとするのである。ただし、慣習的規範からの逸脱はロウチの間でも行われうるし、慣習自体の変化もありう

る。それを例証したのが「第7章：枠組みからの逸脱-ザンサンホ再考」である。慣習からの逸脱は「外部の霊」からの襲撃を受ける危険な行為である。しかし、慣習的行為を継承し実践していると見なされるのは、古くからの先例に従って慣習を実践し、祖先との関係を保持していることを表明してこそである。だから外部条件の変化に柔軟に対応しながら慣習そのものも緩やかに変化しうる。筆者は明言していないが、不変であることが求められる慣習の変化がどのように生じるのかをめぐって、一つのモデルをここで提示しているのである。

第7章までは伝統的なアカ村落民ロウチに関する記述が中心であった。本論最終「第8章：祭壇を捨てる-〈生き方〉をめぐるキリスト教徒とロウチの議論」では、祖先祭祀に関わる儀礼が行えないという経済的理由や慣習的規範への対抗のためにキリスト教に改宗した家族の家屋構造へと視点が転じられる。祖先を祀る祭壇を捨てたキリスト教徒の家屋では、男女の空間的分割を放棄したり、伝統家屋における上手と下手を逆転させるなど、空間の組織や構法などの形式が伝統的家屋とは明確に異なっている。しかし、これらの事実はキリスト教徒の住み手が家屋に意味を投げかけながら生活しているがゆえである。実はその意味ではロウチにとっての家屋との関わりと同様であることを例証した。

評者の理解では、第8章までの記述を通じて、筆者は家屋の構法・間取・素材といった形式に集中しがちであった静態的な従来の建築学的理解を超克し、住み手による家屋の意味づけというエミクな視点を家屋理解に導入した。のみならず、家屋自体と住み手が意味を投げかけあうキャッチボール関係の分析から家屋とひとの相互関係が動的であることを明らかにしたのである。

本書は、アカ語、北タイ語、中部タイ語を習得した筆者によるアカ村落での長期の定点観測に基づいて執筆されている。それゆえ、精神世界にまで踏み込んだアカ社会の現状に対する鋭い洞察が本書中には散りばめられている。とくに、これまでアカ社会をめぐる人類学的研究でしばしば焦点となってきたザンサンホという慣習的規範が、どのように構成され、どのように各個人に解釈され、どのように変化していくのかが、家屋と人の関係に注目することで具体的に示されている。さらに、家屋の物理的形態、供犠を伴う諸儀礼の過程、父方キンドレッドに基づく社会関係などをめぐる記述など、東南アジア大陸部の盆地を占めてきたタイ系諸民族と他のいわゆる山地民の文化比較の上で貴重な民族誌的データが多数盛り込まれている。これらの意味で、本書は表題にある「民族誌」の名に恥じない優れたアカ民族誌である。

評者による書評も人類学の立場からのものであるが、建築学の立場から本書がどう評価されるのだろうか。というのは、本書には明らかに建築学の素養を示す40枚をこえる豊富な建築の平面図・断面図が掲載され、建築学的手法と人類学的参与観察の手法の結合が志されているからである。モノそのもののスケッチ的描写が必ずしも必要とされない人類学の物質文化研究を思い描き、精緻で美しい手書きの家屋図が数多く配列された本書の視覚的な美しさにはほとんど羨望を感じた。もちろんこれらの図が筆者にとって家屋を通じた生活誌を読者に読み取らせるための技術的工夫であることは明白である。では、空間やモノを記述する工夫という点で、本書はどのような民族誌なのだろうか。

多分に博物学的な関心もあった近代植民地における民族誌には、本質主義的な民族観に

基づくモノのスケッチがしばしば含まれていた。近年まで植民地期フランス民族誌の記述形態を引き継いでいるベトナムの人類学者たちは、衣装と家屋を各民族の文化的独自性を示す代表的な物質文化と見なし、それらを写真やスケッチで紹介する民族誌を産出し続けてきた。ただしそのスケッチや写真の上に情報が書き込まれることは稀である。実測図まではないモノの形状描写が主で、せいぜい寸法が横に書き込まれる程度である。本書はそれらとは明らかに一線を画し、精緻な実測図と写真が多数掲載されている。評者は本書を読みつつ、大正期に書かれた『日本の民家』[今 1989]を思い起こした。家屋と人の関わりを対象としているというテーマ設定、スケッチや実測図のような手書きの視覚資料の多用という技術面に共通点を見いだしたからである。『日本の民家』で今和次郎は、屋敷地や家屋の空間利用と構法を地域ごとの気候風土や生産労働との機能的関わりを中心に理解しようとした。一方で本書では、住み手の社会関係や祖先祭祀などの慣習的实践との関わりに注目し、家屋と人の中にある関係が一方向的ではなく相互構築的であることが示されている。ここに本書の新しさがある。しかし、視覚に訴えるための表現的工夫の点では『日本の民家』の方がいっそう実験的であった。今和次郎は精緻な実測図を描いたわけではない。戸口にこれから向かおうとする者の視点からの家屋の全体図を描き出したり、地図と家屋の断面図を複合させたり、家屋をときに俯瞰し、ときに解体し、あるいは情報を文字で書き加えてみたり、実験的工夫を満載させていた。行動情報を地図化する手法をさらに考現学で発展させようとした今和次郎の工夫は、その後人類学や隣接諸学問でそれほど議論されたり、取り入れられたりしたわけではない。写真、録音機、ビデオ、コンピュータをはじめ、さまざまな表象加工の技術を人類学者が駆使する現在、「舞台装置だけで

なく、そこでくりひろげられている生活の〈上演〉」[佐藤 2002 : 77] を記録し、表現する技術について、人類学者はより神経質になる必要があると思う。本書でも生活そのものの様子は、筆者の精緻だが静態描写優先に見える作図より、40 枚以上の写真とキャプションでの説明の方が生き生きと映していた。これまで写真、スケッチ、図などを紙面装飾の方便としてでなく、民族誌記述の一部として効果的に用いることは、しばしば書物の編集段階で問われる問題にとどまってきた。しかし、さまざまなメディアを通してさまざまな意向から異文化が不特定多数の人に紹介される現在、民族誌を通してどのような「真実」が描かれるかは、人類学の存在意義と社会的責任にも直結した課題なのである。

最後に、経済とのかねあいを含めて人とモノの関係に関心を持ってきた筆者として、本書への疑問点を述べたい。本書では家屋の形式について詳細に記述されている。生産から使用・保管を経て廃棄されるモノの一生の中で考えると、本書の家屋をめぐる記述の焦点は使用・保管の部分にあたる。しかし生産と廃棄の部分がほとんど記されていない。まだ比較的新しい村なので、立て替えや改築などの現場にほとんど立ち会えなかったのかもしれないが、それぞれのアカの家屋を誰がどのような道具と知識に基づいて設計し、どのような準備期間を経て、どの時期に、誰と誰が参加して、どのような指揮系統と役割分担で建設されるのか。せめて家屋建築の立案から実行にいたる生産過程、さらには専門の大工の有無、大工道具の種類、作業と役割分担、建築労働に直接参加しない家族成員の仕事と役割、家屋建築をめぐる労働と資本の投下量などが本書中でもう少し示されればよかった。家屋を作り上げる建築過程こそ、住み手にとって家屋へ意味を付与する劇的な第一歩であり、住み手に数十年先までのかなり拘束的な家屋との関わり合いを覚悟させる過程でもあ

るはずだからである。しかもどういう家屋を建てるかは経済的背景にもよるにちがいない。家屋が実際にどのように建築され、また家屋の形式の変化や家屋をめぐる意味づけの変化に経済的要素がどのように折り重なっているのであろうか。この点がもっと描かれれば、家屋と人の動的な相互構築のより日常レベルでの有様が読者に伝わったのではなかろうか。

引用文献

今和次郎

1989 『日本の民家』 東京：岩波書店

佐藤健二

2002 「テクノロジーと記録の社会性」 森明子編著『歴史叙述の現在—歴史学と人類学の対話』 京都：人文書院、64-98 頁。